

第6回基地跡地の未来に関する懇談会 議事要旨

日 時：令和2年3月5日 15：00～17：00

場 所：中央合同庁舎第4号館第3特別会議室

出席者：懇談会委員

(座長) 角南 篤	公益財団法人笹川平和財団海洋政策研究所所長
大崎 洋	吉本興業ホールディングス株式会社代表取締役会長
塩浦 政也	建築家 株式会社 SCAPE 代表取締役
中村 彰二朗	アクセント株式会社
	アクセント・イノベーションセンター福島センター長

：有識者（五十音順）

大城 郁寛	琉球大学国際地域創造学部教授
岸井 隆幸	日本大学理工学部特任教授
富原 加奈子	沖縄県経営者協会女性リーダー部会部会長
西田 睦	琉球大学学長
真喜屋美樹	名桜大学リベラルアーツ機構准教授

：内閣府

別府内閣府審議官、宮地政策統括官（沖縄政策担当）、水野大臣官房審議官、中嶋参事官（総括担当）、苧坂参事官（政策調整担当）、中原企画官（政策調整担当）

【議事次第】

- 1 開 会
- 2 議 事
核となる施設・機能のありうるオプションについて
・有識者ヒアリング
- 3 閉 会

【配付資料】（委員・有識者限り）

- 資料1 中間取りまとめ（素案）（概要）
資料2 中間取りまとめ（素案）

【議事要旨】

座長から議事について説明があった。

- 本日は有識者ヒアリングを行う。この懇談会では、今後返還される大規模基地の跡地利用の核となる施設・機能のありうるオプションを提案するため、昨年6月から5回にわたって意見交換を行ってきた。先週の第5回会議では、当懇談会のこれまでの意見を「中間取りまとめ」として公表することに向けた議論を始めた。本日は、これまでの意見を整理した「中間取りまとめ（素案）」を基に、沖縄振興や跡地利用に知識・経験の深い有識者の皆様からご意見をいただき、議論を深めたい。

事務局から資料1及び資料2を説明した後、各有識者に発言を求めた。

<有識者発言>

- 「中間取りまとめ（素案）」について、基本的な考え方には賛成である。今までの跡地利用を見ると、いずれも商業施設を作って客のパイの奪い合いをしているだけである。例えば、那覇の新都心地区は栄えているが、周辺の市街地はさびれていると感じる。今までのような商業施設を作るという跡地利用は難しいと思う。商業施設等以外の（施設・機能）を考えるのは難しい問題であるが、「中間取りまとめ（素案）」に示された（オプションの）案は、非常に斬新なアイデアであると思う。

ただし、課題もある。1つは、沖縄科学技術大学院大学（OIST）があるが、大学院大学自体は成功していると評価も高いが、沖縄振興にどう結び付いているかということに関しては、やはり疑問が残る。外とのつながりが非常に弱い施設になっていると感じる。今後の跡地利用（の核となる施設）については、できるだけ周辺と有機的につながりを持てるような施設としなければならないと思う。もう1つは、新聞報道によると、県は普天間飛行場等の米軍基地の返還時期が見通せないため、基地跡地で想定していた人口フレームを基地以外の市街化調整区域に振り分けることを検討し始めているとのことである。今後返還される軍用地は、県が検討している那覇広域都市計画の区域に全て含まれるため、広域都市計画との調和、調整をどう考えるかということも課題であると思う。

（その上で）どういった施設が良いのかと考えてみると、観光の観点からは、那覇市にはアミューズメントが非常に少なく観光客が来て遊ぶところが、特に夜は飲食店しかないことが問題であると考え。そのため、劇場を作って公演や試合等を行い、観光客だけでなく地元の人も含めて楽しめる場所があると良い。また、その周辺には、例えば台湾の夜市のような街が広がっているようなものが良いと考える。那覇の観光アミューズメントをもっと豊かにする取組があると良いと考え

る。また、以前は重粒子線治療の施設を置こうという議論もあったが、中間取りまとめ（素案）にも「健康」が掲げられているように、県民だけでなく中国等からの観光客も含めて医療サービスを提供する施設を考えるのも良い。

- 普天間飛行場の跡地利用を念頭に発言したい。（普天間飛行場の跡地利用の）計画づくりについては、平成15年から検討する場が設けられ、県と宜野湾市で「普天間飛行場の跡地利用の基本方針」を策定した。その後、利用計画の議論を進めてきたが平成25年に県と市が「全体計画の中間取りまとめ」を策定し、その具体化に向けた詰めが行われている。当初は長くても復帰50周年の頃には返還されて本格的なまちづくりがいよいよ始まるのではないかと考えていたが、その後の様々な状況変化もあり、現時点では代替施設を造るのにこれから10年以上かかると言われている。加えて、跡地利用の特措法ができて国が（返還後に）不発弾の撤去などの支障除去をすることになっているが、西普天間住宅地区の場合は面積約50haで支障除去に約3年かかったことから考えると、普天間飛行場は480haなので、単純計算で30年、頑張っても20年、10年はかかることになる。当初の計画から見ると時間がかかり、時間軸のずれが生じている。見通しのはっきりしない中で当初の計画において市がイメージしていた機能も、（時間の推移の中で）新しい機能を入れ込んでいくなどしてきており、沖縄全体にとって大事な場所なので、ここから沖縄の振興・発展を目指すという思いで議論してきている。

1つ目のお願いとしては、現時点の時間軸を踏まえると、20年先のビジネスをどう描けるかという非常に難しい問題に直面する。しかし、その間に何もしないということはないので、むしろ、その間にどんなことをやるべきなのかについて、懇談会からアイデアをいただくと嬉しい。現在、普天間飛行場内の地権者は約3,700人いらっしゃる。15年前と比べると、相続等で細分化が起きたことで地権者数は1.36倍に伸びている。今後、10年、15年経つと更に細分化が進むと見込まれるので、跡地で拠点的な施設のための用地を十分に確保することが容易ではなくなってくる。拠点的なアクティビティを導入する空間を一番適切な場所に配置したいと考えているが、跡地利用の特措法では、収用法が適用できそうな特定の都市施設は先行買収（の対象と）できるが、（このような）拠点的な施設の用地は先行買収の対象とはできないことになっている。東日本大震災における震災復興の拠点整備のために全面買収方式による都市整備がなされたが、基地跡地も同様に拠点整備の種地を先行的に確保することができないか。懇談会がこの課題を直接的に議論する場でないことは承知しているが、時間軸やプロセスについても何らかの意見をいただくと、計画を進める立場としては助かる。

2つ目のお願いとして、（跡地利用の）拠点的な施設に関して、地元の議論では「環境」「平和」「国際交流」といった言葉が出ている。具体的には、普天間飛行場

は台地状になっており、斜面、緑地がかなりある。下には大山湿地があり、湧水が多く湧いており、それを利用して芋の耕作が行われている。この水は普天間飛行場等の台地から、琉球石灰岩の中を通過して出ており、この水脈を守らなければならない。また、どの緑は大切にすべきかといった議論をしている。中間取りまとめ（素案）においても、振興の中核となるリサーチパークなどの施設・機能とそれを包摂する幅広い施設・機能として示されているように、リサーチパークはリサーチパーク、緑は緑という（まちづくりには）できる限りしたくないと考えている。従来のように、公園は公園として緑を守る施設とし、リサーチパークはセキュリティも考えて壁で囲った中で研究をするという（まちづくり）ではなく、緑の中に研究施設があるというような（まちの）構成こそ望ましいので、何とか実現できないかと考えている。核となる施設と周辺とが融合した、より相互に支え合うような環境づくりというものを提案いただきたい。（例えば、跡地に）大きな緑として100ha規模の国営公園のための用地を確保するよう願っているが、単に100haの緑地が一面に広がるというのではなく、水の道、守るべき緑がゲリマンダー状に（絡まって）広がり、かつ、公園とリサーチパークの境がはっきりと分からないような新しい形の都市を創り上げたい。これは「環境」やゼロエミッションへの強い配慮を当初から地元で議論してきたことと通ずるものである。

3つ目のお願いは、この懇談会の趣旨とはずれてしまうが、一番のネックとなるのは、現在の基地内に立ち入れないことである。広大な基地の中に文化財が存在することは分かっており、その概ねの位置も分かっているが、どのような形でどう残っているかは、現地調査ができないので分からない。緑についても、価値の高い緑がありそうだということは分かっているが、貴重種があるのかといった具体的なことは分からない。琉球石灰岩の厚さや強度、おそらく（基地の下に）鍾乳洞のような穴があるが、どこの上（の土地）なら（拠点的な施設等の用地として）使えるのかということも、現地でボーリングをしなければ分からない。現在は基地として使用されているので、実際に（跡地利用の）計画の対象区域としている中の状況が把握できていない。早い段階で、外縁から少しずつでも良いので（立ち入り調査を）させてもらいたい。480haもの土地が突然に返還されてから支障除去と同時に文化財調査を行うようでは、相当に時間がかかり、せっかく返還されても十分に活用できないこととなる。できるだけ現地の中に入れるよう支援していただきたい。

また、（跡地利用の）計画を考える上で、基盤のネットワークとして必ず必要となる軌道系や幹線道路系については、重点的に先行して事業を進められるようにするためにも、計画方針を、現在も検討されていることは十分に承知しているが、なるべく早く明確に示していただきたいと考えている。

○「中間取りまとめ（素案）」を見たところ、わくわくする話が多いと感じている。

素案の最後にも述べられているように「ビジョンの共有」「世界からの多様な視点」「持続可能性」「インクルーシブネス」は、重要視していたことである。まず「ビジョンの共有」については、皆の議論をまとめていく上で最も重要なのがビジョンであり、大きなスローガンのようなビジョンが必要と考えていた。例えば、素案にも「住めば健康になる日本一の『健康都市』」というキーワードが示されているように、全体のキーワードとして「世界で一番幸せになれる島」や「一番人に優しい島」を目指すものとするれば、その下で色々な計画が進んでいても、それら全体を包含するものがあるので、時間軸と色々な事業等をつなげていくことが容易になると思う。（「世界からの多様な視点」「持続可能性」については、）これまで懇談会では世界の事例を参考に検討してきたと承知しているが、日本、アジア、世界の中の沖縄という視点において、提案されたオプションには事業性があるものか、持続可能なものであるかを考えることが大きなポイントになるので、地元の自治体と連携しながら今後検討していくことが必要となる。（「インクルーシブネス」については、）東京などの方は皆さん沖縄を褒めてくださるが、沖縄の良さは沖縄の中の人間からは気付きにくい。県外の方はよく「沖縄（の人）は優しい」と言う。包容力があり、本当に優しくて、それが沖縄の強さであると思う反面、競わない優しさや突き詰めない曖昧さが、逆に歯がゆく、沖縄の弱さでもあり、心地よさだったり、改善しなければならないところでもあり、同時に守るべきところなのかもしれない。

「インクルーシブネス」は、トレンドな言葉だと思うが、どう捉えるかということがある。もちろん皆を取り残さないという意味であるが、その向こうに、皆で共にしっかり切り拓くというような力強さがもう少し欲しいと考える。一方で、包容力のある沖縄は、世の中の変化が著しい中で、もしかすると人が一番大事にすべきところを大事にできている島でもあるかもしれない。一周遅れだけでも気が付くとトップランナー的なものを有しているところに、人々は心地良さを感じてくれているのかもしれない。そのため、中間取りまとめにおいても、こうした根本の価値観を大事にする必要がある。例えば、「理想居住空間」とは、誰にとっての理想なのか。いらした方が心地良く感じるのは、地元の人と一緒に暮らしやすさではないのか。（そこに住む人が）同じ価値観を共有し、共に大事にして、保っていける社会でなければならない。（基地跡地の利用のシーズが）如何に地元と重なり、つながっていくかというところが必要である。（跡地利用の）シーズを情熱を持って共に磨いていく、改善すべきテーマがあっても共に乗り越えていけるよう、共有する思いをどう作っていくかが重要である。例えば、懇談会の趣旨からは飛ぶかもしれないが、沖縄を象徴するモニュメント等について、地元で皆が検討した時には、現在イメージしているものとはまた違う形のものになるかもしれないので検討が必要である。最後に、これも懇談会の趣旨とは飛ぶが、（こうした跡地利用

の考えについて) 時間を経ても記録等の引継だけではなく人が人としてつないで完成までつなげていく環境づくりもお願いしたい。

- 「中間取りまとめ(素案)」に対する全体の印象としては、前向きな志や姿勢が感じられ、非常に好ましいとの印象を持った。ただし、あえて言えば、もう少し具体的にわくわくする部分があっても良いかなという印象である。その上で感想を3点述べる。いずれも素案にも既にかかれており、非常に良いと思っているが、その上でもう一歩進んだ記述を求めるものである。1つ目は、沖縄の自然の豊かさやユニークさを観光、創薬、教育などの資源や素材としてもっと活かす観点について、沖縄県内でも世界自然遺産登録が今年いよいよできるのではと言われており、世界的に認知されてくることも踏まえて、しっかり位置付けるのが良いと考える。2つ目は、素晴らしい志や姿勢が示されているが、その持続可能性を確保することが重要であると考えている。そのためには、やはり人を育てることが大事であり、そうした観点がもう少し強調されると良いと思う。ここでの人材育成としては、幅広い人材を念頭に置いており、例えば、修学旅行で来た生徒たちに関心を持ってもらい、親や祖父母になってからも子や孫を連れてやって来て、(事業実施の)サポーターとなってきている事例がある。沖縄にもたくさん修学旅行生や世界からの観光客が来るので、リピーターにとどまらず、サポーターになってくれるようにする。そのような人材育成が跡地利用においても大事だと思う。3つ目は、既にグローバル展開の視点の重要性は述べられているが、そこにアジアの活力との連携という観点がしっかり位置付けられると良いと思う。自ずと経済活動に活力を生じる要因として、人口ボーナスが挙げられる。まだ人口増の地域としては東南アジア、インド、さらにアフリカがあるが、人口ボーナスの姿がそろそろしっかりと見えてくると考えられるのが東南アジアである。そのダイナミズムを沖縄がゲートウェイとして、日本全体のためにも展開していくという観点が、もう少し明確であっても良いという趣旨である。

具体例を出すと、日本学術会議が2016年に日本に国立自然史博物館を作るべきとの提言を出しており、その適地について研究者の中で議論したところ、沖縄が良いということでもとまっている。その理由としては、先進国の自然史博物館は都会の真ん中に置かれており、生物界の多様性を直接見ることはできないが、沖縄は先進国の中にありながら豊かな自然が本当に間近にあることである。1時間、2時間で行ける距離の中にリアルなサンゴ礁があり、マングローブ帯があり、亜熱帯の森林がある。また、こうした議論の中で、先程も触れたようにこれから経済的に伸びる東南アジアなど、アジアでは行き過ぎた開発がなされる可能性がある中で、自然の大切さに早くから気が付いてもらうことこそ、日本が果たすべきことであり、これを通して世界貢献、アジアの広い意味での平和への貢献ができるのではないかと、

という議論が加わった。(この構想は、沖縄が) アジアや世界に目を向けている地域であることや、沖縄の亜熱帯の自然に立脚して、世界トップレベルの学術的基盤を構築するもので、それが基になって観光や地元の教育、修学旅行生の教育などの人材育成につながり、交流の場の提供にもなるというものである。(この懇談会での議論とも) 親和性がある事例として参考にしていただければと思う。

(素案の) 具体的な箇所について述べると、(最初の背景説明として)「沖縄の経済・社会を牽引する」という表現があるが、より幅広く、例えば文化を入れても良いのではないかと。また、「長寿健康医療都市」の考え方は非常に素晴らしい。沖縄バイオインフォメーションバンクと同様に動き始めている取組とも結び付けることができそうである。例えば、名護には海洋研究開発機構 (JAMSTEC) のブランチである国際海洋環境情報センター (GODAC) があり、海洋系のデータバンクを持っている。また、琉球大学等にも熱帯生物資源のデータベースがある。「アジアのゲートウェイ」に関しては、急速に展開しているアジアとしての位置づけを記すと良い。また、物流基盤だけでなく人、文化等の交流の基盤など、もう少し幅広くするとより良いと思う。

- 那覇市のおもろまち (通称「新都心」) と、1990 年代後半に大規模な再開発が行われた北谷町の美浜アメリカンビレッジは、以前は跡地利用の成功例であると評価されていた。しかし、中南部都市圏における大規模な跡地で行われた、外部資本に依存した商業型の再開発には課題も多く、必ずしも成功とは言えないことを、かねてより指摘してきた。基地が無くなった後の空間で、同じような顔を持つ商業地が形成され、さながら金太郎飴のようなまちづくりが行われていたからである。沖縄のように市場やエネルギーの限られた島嶼地域においてパイを奪い合うような再開発を行っても、全く持続可能ではない。中南部都市圏の広域で跡地利用を考え、それぞれの地域で機能を分担することが必要であったが、開発当時は、広域で考えるという発想自体がまだなかった。近年、沖縄県においても跡地相互の競合による全体発展の阻害であるとか、良好な環境形成につながらないことへの懸念が指摘されるようになり、中南部都市圏を一体として捉える視点の重要性が明示された。この懇談会が置かれたことも含めて、ようやく跡地利用における課題が共有され、新しい跡地利用の方法が考えられる時代になった。

跡地利用には年代毎に特徴がある。1970 年代には社会インフラの整備が中心であった。1980 年代には、グローバル化と軌を一にして、外部資本を呼び込んで商業型開発をする手法が登場した。1990 年代になると、美浜アメリカンビレッジやハンビータウンのように、海浜リゾートと商業施設を一体化してまちをつくる手法が出てきた。2000 年代に入ると、おもろまちのように、企業が主導する跡地利用が出てきた。1980 年代以降のこうした大規模な再開発は、主として沖縄の人口

と産業が集中する中南部都市圏で起きているが、それには、基地返還に当たって地権者の皆さんが抱える問題が大きく影響している。そうした中で、通称「跡地利用推進法」が施行され、国の責任によって主体的に跡地利用を進めることが示され、また、返還後も（地権者の皆さんが）生活に窮することのないよう、給付金の制度の拡充などが行われている。

読谷村では、北谷町やおもろまちと同じ中南部都市圏にありながら、独自の跡地利用が行われた。読谷村では返還された空間を一大農業拠点として活用し、第一次産業中心の跡地利用を行った。その背景の一つに、1986年に村おこし事業の成果として商品化された「紅いもタルト」がある。「紅いもタルト」は、村の婦人会や商工会などが中心となって村の特産品として商品開発された。軽トラックでパイを売っていたような小さな製菓会社が試作、販売したことから始まり、ここまで大きな経済波及効果を生み出すまでになった。読谷村は、戦前から紅芋の産地として大変名高かったが、「紅いもタルト」の成功は、もともと地域にあるものをどう活かすかという考えで取り組んだ結果だと思う。「紅いもタルト」は読谷村ブランドとして定着しただけでなく、今では沖縄を代表するお土産に成長している。材料となる紅芋は、かつては読谷産のみを原料に使っていたため、地域の生産量も拡大した。また、読谷村で収穫した芋をいつでも使えるようにフリーズドライにする新たな技術もここで開発された。このように、6次産業化の実現による地域内産業連関が形成され、村への経済効果は目覚ましい。読谷村の例は、高付加価値農業の実践により沖縄の潜在力を活かすことができた事例だと思う。農業に限らず沖縄には大変豊かな自然があり、これを活かさない手はない。

跡地利用を考える時、返還後の空間のみをどうするかというだけでなく、県土構造再編のビジョンを持つ必要がある。基地が返還されるということは、戦後本当はあったはずの空間が返ってくることを意味する。基地が造られなければ、一番住みやすい平坦な土地に住居、教育施設などを造るという都市計画が行われたであろうが、それが出来なかった。そのため、中南部都市圏を見ると、北谷町にしても浦添市にしても、高低差のある狭隘な空間に住居地が形成されているところが結構ある。現在、基地が所在する空間も県土なので、沖縄全体を俯瞰して、ここは商業地域にしたい、ここはリゾートエリアにしたいというように、どの地域にどのような役割を担わせ、その上で、跡地にはどういう役目を果たさせたいのか（を考える必要がある）。返還されたそれぞれの土地のみの機能や施設をどうするかという視点では、虫食い状態のように再開発することになり兼ねない。機能や施設を一度張りつけてしまうと、剥がすことは難しい。30年、50年先だけではなく、100年、200年後の沖縄はどうあって欲しいのかという長い視点が重要である。沖縄は今、大胆な都市計画を行えるチャンスに恵まれていると考えることができる。

また、跡地利用をイメージする上で、日本全体の計画の中で沖縄に期待される役割について考える必要がある。アジア・太平洋地域の結節点という考え方は既に素案にも入っており、重要な視点である。沖縄がどのようなイニシアティブをとれる地域なのか構想する必要がある。

このような観点から、「中間取りまとめ（素案）」について意見を述べる。跡地を考える上では、沖縄全体をもう一度作り変えるぐらいのイメージが必要である。素案で示されているように、産業振興の核を作ることが重要で、それと同時に「沖縄らしさ」や沖縄でしかないものをどのように活かすかという観点が重要である。

まず「沖縄長寿健康医療都市」については、医療の発展は非常に重要であり、近未来的である。他方で、インクルーシブな空間づくりを進めようとする中で、エクスクルーシブに受け取られないかと感じた。跡地は、沖縄の人たちが求めて返還される空間である。沖縄の人たちが、この空間でどのように暮らすのかという生活が見えにくいように思う。

また、沖縄のような島嶼地域では、東京のようにエネルギーを大量に消費するようなまちづくりは非常に難しい。都市計画をする上で、エネルギーをどうするかを考えることは不可欠である。

さらに、「沖縄先端実験都市」にはどの程度の投資が期待できるのか。シリコン・バレーのような投資を期待すると、最低でも、1億、2億ではなくて10億単位、100億単位の投資が期待できる機能を持たせなければならない。実現可能なのかという思いもある。また、5Gの時代に入るが、返還時期が見通せない中で、今後20年、30年でITやAIの進展には想像を超えるものがあると思う。例えば、現在でもテレワークが始まっている状況の中で、今後も、コラボレーション・ラボなどのような建物のニーズが続くのか。

「OKINAWAを満喫するシンボリックな施設の創出」については、ドバイのように（人工的に）作られたものではなく、沖縄の人々が暮らすことによって自然と作り出されていくもの、沖縄的なフレーバーを付けるのではなく、地に足の付いた暮らしの中から醸し出されてくるものにこそ価値がある。「沖縄学の父」と呼ばれる伊波普猷の言葉に「汝の立つところを深く掘れ、そこには泉がある」というものがある。読谷村は、この言葉に基づいて、自分たちは何ができるのか、一番の武器は何なのかを掘り下げて跡地利用や村づくりを行ってきたと伺っており、この視点こそ失ってはならないものだと思う。

また、産業振興の核を配置するだけでなく、沖縄県側にどの程度の権限が移譲されるのかという地方自治の仕組みも伴う必要がある。例えば、商業型ではない素晴らしい機能や施設が配置された時に、沖縄側はどれぐらいの権限やメリットを持てるのかということも同時に考えなければならないと思う。

沖縄にとって土地は、戦前そこに住んでいた方々の記憶や歴史が埋め込まれているもので、ずっと返って来ないのをフェンスの向こう側から眺めていたという歴史がある。この空間が返ってくることは、単に再開発の土地が登場するというだけでなく、失われた土地の記憶、沖縄の記憶を取り戻すということでもあるので、そういう観点も含めて考えることができたらと思う。

<意見交換>

[凡例：○有識者、●委員]

- （有識者の意見と懇談会の意見は）大きくずれてはいなかったと感じている。
- OIST については、東大を超える程の研究成果が出始めており非常に優秀な大学であるが、地域経済との連携に課題があるというご指摘があった。震災復興のために会津大学をどう活かすかという取組においては、世界的な民間企業を約 21 社会津に誘致して共同研究を進め、学生が東京ではなく会津で就職するモデルを作るのに、8 年もかかった。しかし、それによって地域経済が盛んになり、人口減も止まった。産業界と OIST や琉球大学などの学校との密な連携については、沖縄でも十分できると思う。
- ハードについて、20 年後を考えなければいけない、あるいは（実現に）30 年かかるというご指摘があったが、前回の懇談会でも議論があったが、すぐに始められることはたくさんあると考えている。例えば、デジタルコミュニケーションにより市民一人一人から将来の発展のためのデータ集めを行うことなどである。
- 返還前から事前に取り組むべきとの話があったが、福島復興においても、浜通りに拠点を作れるのを待っていては、現在になってようやく始められることになるので駄目だと考え、会津に拠点を作って事前準備を始めた。いよいよ今年から浜通りを手がける。早く着手できるどこかに受け皿ができれば、そこでモデルを作りつつ、どんどん移転を進めていけるのではないかと思った。
- ビジョンをしっかりと作らなくてはいけないという意見に対しては、前回の懇談会でも議論したが、その通りであると思う。また、自然や第一次産業の視点については、もう少し強調する必要を感じた。もともと（基地が）無かったらどうだったのだろうかという視点は大胆であるが、まちづくりをもう一度考え直す必要がある。懇談会が決めたものを地元の皆さんに提案するのではなく、皆が作り上げることを重要視して議論してきた。
- （沖縄長寿健康医療都市について、）日本は医療の問題を大きく抱えている割には、研究センターがない。沖縄の人のためだけでなく、日本全体のために沖縄がモデ

ルになること、さらにアジアを引っ張っていくことが重要だと思う。日本の中の沖縄という視点で考えており、エクスクルーシブなお金持ちだけの施設を作る意図では全くないので、誤解されないようにしたい。

- 学生が進路を決める時に、自分がやりたいことを積極的に選ぶ、ワクワクするモチベーションが上がる進路選びのことを「ワクモチ進路」と言うそうだ。(跡地利用の)プロジェクトも、沖縄県民の人たちが、離島の人たちも含めて「ワクモチ」で20年、30年もできれば良いと思う。長くかかることを良しとし、ハードではなく、ソフト面をどう充実させていけるかを考えていきたい。そのためには、人材育成、教育が重要だと思う。ソフトが先行し、そのソフトが30年後にはすごく充実し、そこからハードを考える。これまでの沖縄経済のあり方やお金の流れ方とは違うあり方を考えることができるのではないか。貧困とかCO₂排出ゼロとか失業ゼロとかの課題解決を重視できるのではないか。アジアや地球規模での賛同を得て、様々な人が沖縄で参加してもらえることを目指せるのではないか。例えば、野球選手やサッカー選手が子供たちとワークショップをしたり、デジタルを用いた遊びと学びのワークショップが行われたりしているが、そうしたことにも取り組めるのではないか。地元の方々と「次は何をしよう」と考える場となっている。
- 国立自然史博物館については、子供からお年寄りまで、地元の人でもそうでない人も楽しめるものである。沖縄の海や里や川や山や沼といった自然の中に建物があって、博物館に行く道中も自然を学ぶストーリーがあり、博物館から出てきた後も学ぶ意欲につながるものとすれば、ワシントンDCにもニューヨークにもパリにもない沖縄ならではの形のものができる。ただ、基地の所在する本島中南部に限らず、沖縄全体を見渡して、北部やんばるや離島も含めて沖縄全体のプロジェクトとして位置付けた方が良いのではないかと思う。
- ソフト面の充実として人材育成をもっと強調することは必要だと思う。人材・職業の育成において重要なのは、働き口が本当にあるんだ、という学校を作ることである。混沌さんという沖縄出身のYouTuberは、子供の頃はいじめられていたそうだが、今では一番人気がある。沖縄には、これからの新しい職業や産業をつくり出す人材や場をもっとあると思う。ソフト面においても、オタクが産業になったということが本当ならば、新しい産業を創ることができるのではないか。
- 都市計画やまちづくりをする際に往々にして抜けている議論が、そこに労働があるのか、仕事があるのかという話だと思う。海外でブームとなっているサーキュレーションエコノミーやビレッジなどの先行事例を視察して、よく見落とされてくることがある。成功していない所は大体何かが注入されているのに対して、成功している所はそこで自発的な労働や産業が出てきている。沖縄で広大な跡地が返ってくるが、そこに労働でない何かが流れたのではフェイクになってくるとい

とに自覚的にならなければならない。

- 沖縄の成長モデルはどういうものかということも考えなければならない。沖縄の人口を今後、増やしていくのか、キープしていくのか、あるいは爆発的に増やしていくのかを議論しないと、これからのまちづくりの基本が置けないと思う。一般的には、再開発した後には過疎が来る。過疎地というとネガティブなイメージがあるが、それ自体はそれ程悪くなく、過疎の仕方が問題となる。基地跡地について、良い過疎を前提にするのか、都市化を支援するものとして考えるのかなど、幾つかシナリオがあり得る。
- (読谷村の例に関して) 都市計画は、大きな面を扱うものなので、軸などをイメージしがちであるが、おいしいレストラン 1 軒つくるといようなポイントを押さえていくことが大事な戦略だと思った。既に成功例が沖縄に幾つもあると思うが、そうしたものを起爆剤として(跡地利用のポイントを)作っていくことが必要である。そうした基本姿勢は大事にしたい。
- 20 年、30 年という時間軸において、場合によっては子供から孫に受け継がれていくことを考えた時に、「沖縄らしさ」とは何かということについて皆さんお話になったと思う。「沖縄らしさ」を深掘りして言語化できれば良いと思う。
- 県内で 8 百数十億円ぐらい、返ってくる(嘉手納)以南だけでも 2 百数十億円ぐらいの軍用地料が発生している。特に那覇軍港は最も軍用地料の高いところである。地権者がしっかり張りついている土地をどう開発していくのか、非常に難しい問題だと懇談会の委員も認識されていると思う。やはり土地を県民の財産としてどう使っていくのかという議論や県民の意識改革が必要であると感じた。地権者だけの問題や所在する市町村だけの問題ではなく、県民のこれからの財産という意識で、将来の沖縄をどうするのかという議論をすることが必要だと思う。
- 今日、話をしていること自体がわくわくしている。雲の上の話だと思っていたことが、役割を得てはじめて実は自分の話やテーマそのものだったと気付くこととなる。地元の若い人たちも含む様々な世代の人たちと、このことをテーマにして話し合う場が、早く、たくさん作れると良い。話し合う中で色々な理解や判断する力も出てきて、色々となんか発想も出てくると思う。沖縄全体の話、沖縄の長い将来の話もあるが、当事者にならないといけない。当事者意識をどう作るかが、これからの大きなテーマと人材育成につながってくる。それが情熱につながり、成功につながると思う。
- 普天間飛行場と牧港補給地区と那覇港湾施設の 3 つの土地の役割分担はとても大事だと思う。難しいお願いだとは思いますが、それぞれが何を指すと相乗効果が生み出されるのかを示していただけると良い。そのためには、もう少しオプションの数が増えると良い。

- 一貫して明確な方向性でリードしていく大きなプランと、それにしっかりと応えていく地元の自発的な活動の両面が必要なのだと思います。地元の人間と、リードしていただく委員方の両方の力が必要だと思う。
- 最初、沖縄全体で考えた時にどの機能がどの地域に必要で、どの機能を貼り付けていくのかということがイメージできなかった。全体の中で各地域をどう位置付けるかということを知りたい。それが明らかになると、隣接する空間とどうつながり、連携するのかということや、どのように沖縄の人たちにとってハッピーな空間になるのかということが見えることになると思う。
- 「沖縄らしさ」をできるだけ深掘りして言語化するというのは非常に難しい。大田昌秀元知事が「沖縄の心」について様々な著作で述べている。「沖縄の心」というものから考えて、まちづくりなどどうあるべきかという理念のようなものがあると、ぶれずに歴史に耐え得るまちづくりができると思う。

座長から今回の有識者の意見を踏まえて、中間取りまとめをまとめていきたいとの発言があって意見交換を終了し、閉会した。